【コロナ禍の中での活動報告 1】

コロナ禍において、生きかえるボランティア活動

ゆくはし屋根のない博物館　市民学芸員の会
会　長　　森　岑而（しんじ）

皆さんこんにちは。行橋から参りました「ゆくはし屋根のない博物館　市民学芸員の会」の森でございます。よろしくお願いいたします。

まず初めに、私たちの住んでおります行橋市を紹介させていただきます。
行橋市は福岡県の東部に位置し、非常に自然豊かな街でございます。
古代から、豊の国と言われており、食べ物も海の幸、山の幸というのが豊富でございまして、人口が今 7 万 2800 人位です。年々、何十人か増えてきております。
北九州市ならびに隣の苅田町、こういったところのベッドタウンとして、今栄えている所でございます。駅前は、今から 10 年前と比べたらずいぶん高層ビルが立ち並んでおります。これからもまだまだ増えると思いますが、そういった所です。

行橋は、豊の国の中で一番、史跡や古墳等が沢山点在しております。
それを総称して、私たちは「屋根のない博物館」というふうにとらえ、会名を「ゆくはし屋根のない博物館　市民学芸員の会」としました。本当に屋根のない博物館かな、とお思いの方がおられるかと思いますが、現地には屋根がありません。

ボランティア活動は、主に歴史のボランティアガイドをさせていただいております。
ところが今回、令和元年度からのコロナ感染の拡大で、わたし達のボランティア活動もこのままでは「解散」ということになるのではないか、と心配をしました。
いつも多くの人を集めて、いろいろなところを案内する活動ですので、三密を始め大人数が集まる集会でのコロナ感染のリスクは非常に高いわけです。
そこで、それを避けるためにどうしようか、と皆さんで議論をしました。
このまま放っておいたのではボランティア活動は出来なくなると話がまとまり、今後はいろいろなものに取り組んでいかなきゃいけないと考え、ボランティア活動の転換を図りました。今回は、野外活動にシフトを移すこととしました。

今やっておりますように、これは馬ヶ岳での活動です。
皆さん方ご存知と思いますが、黒田官兵衛のドラマに出た場所、これが馬ヶ岳ですが大勢の方がここを訪れました。そこの整備をコロナ禍で皆さん方の案内が出来ない間に「一つこれを手掛けていこう」ということで取り組みました。

次は、新しく整備されました沓尾の石切り場の清掃活動です。

今度、新しく始めた所です。

細川忠興の大阪城に、この山から石を切り出して送ったと言われていますが、荒れ放題になっておりました。そこで、これを私たちの手で整備しようと野外活動を中心に行って参りました。

また、私たちの所には守田蓑洲（もりたさしゅう）旧居、という文化財があります。
この旧居周辺の除草作業、あるいは樹木の剪定などの定期的な作業に取り組むことにいたしました。今まで少ない職員だけでは対応できなかったところを、ボランティアが新たにお手伝いした一例でございます。

それからもう一つ、埋蔵文化財の発掘作業を現在、市の方でやっていますが、それにも私たちが参加することにしました。私たちが参加して扱い方がわからなくて失敗もありましたが、私たちにとっては貴重な体験となりました。これからは発掘の活動は、「参加」だけじゃなくて「参画」をしたいな、とそういう風に考えております。
このように、野外活動に重点を置いた活動に取り組んでおります。

私たちは、平成 17 年にこの会を発足させております。
その発足から丁度 15 年が過ぎますので、自分たちの活動をどう振り返ればよいか、ということを皆さんと協議しました。その結果、文集を作ろうとなって、いろいろな編集に挑戦してみることになりました。そこに載っているように「15 年の歩み」というものを今日少し持ってきておりますが、自分たちの手でしかも経費をかけないで作ってみました。
皆さん非常に喜ばれて、これを活用していただいているところでございます。

またコロナになって、夏休みなど子供たちが家の中で何もできないという話がありましたので、私たちで手づくりした歴史に関する古代の作り物を使った考古学者養成講座というのを開いています。子供たちが中心ですが、大人も含めて講座を行っております。
皆さん、大変喜んでいただいております。

それから歴史資料館から「15 年の歩みの展示を自分たちの手で作ってみては」とのアドバイスをいただきました。始めて見ましたが、大変な作業でした。
展示とかいうものは、博物館とか歴史資料館などいろいろな所に見に行くものだ、と思っていましたが、今回は自分たちの手で制作したものを一般の方に見てもらいました。
皆さんの反応は思いの外で「こういうことをやってくれたんか」と、非常に喜ばれて好評をいただいております。

またこの 15 年の歩みの中でグラフが見えますが、一番高いところが黒田官兵衛の番組が放送された時です。行橋に、3 万人 4 万人というお客さんが押し寄せました。
毎日のようにガイドをしましたが、そういった記録も懐かしいなあ、と今思い出しております。

私たちは 15 年を振り返ることで「こういう活動が出来たんだ」という想いと、これからもしコロナとかになった場合、どういう風に乗り越えていくべきかという時のために非常にいい体験になったと思います。

コロナ禍の中でこのような作業に取り組むことが出来て、大きな収穫だったな、というふうに思っております。
次に出ているのが歩みの中の展示の一つですが、今、紙芝居を作っています。
その紙芝居は、地元、行橋の方で末松謙澄（すえまつけんちょう）さんという方ですが、皆さんに知られてないので、私たちボランティアの仲間で多くの小学校、中学校に紙芝居を持ち込み、末松謙澄さんを売り込んでいくという企画に今、取り組んでおります。

いろいろな作業に従事しながら、これからどういう風に取り組んでいくか、それからボランティア活動の在り方、また考え方、そういったものを自分たちが今回経験させていただいた事柄を踏まえて、前の講座でもありましたように、諦めるっていうことじゃなくてこれを工夫していくということで、これから困難に直面した時に乗り越えていきたいと思っております。
さらにそういうことを一般の市民の方にも知ってもらいたいと考え、行橋駅の構内に「今こういう活動をしていますよ」という展示物を作って市民に見てもらっています。
このような PR も私たちの手でやっています。
今後もいろいろな工夫をしながらボランティア活動を進めていきたいと思います。

今回得た多くの体験の中で、歴史資料館や図書館あるいは行政等の職員さんと一緒に物事を処理していく、協働っていうことが非常に私たちの為になったと思います。
資料館の職員の皆さんには今回は、いろいろなサポートをしていただきました。
歴史資料館の館長が「歴史資料館、博物館、それから図書館等については、これは行政の一部の建物ですが、その中身については市民の為の展示でなければいけない。市民が楽しむため、あるいは生きがいを感じるためのそういった資料館にしていきたい」といつもおっしゃっておられます。
私たち自らが参画することによって、求められる歴史資料館などが出来上がるのではないかなということで、将来そういうことに力を入れていきたいな、と思っております。
以上で説明を終わらせていただきたいと思います。
ありがとうございました。